読み方のポイント　古文の物語を読む

一　**『竹取物語』**　平安時代の初めごろにできた、今に残る中で日本でいちばん古い物語。作者はわかっていない。竹の中から見つかった女の子（かぐや姫）が育ち、最後は月の都へ帰っていく話。

二　**歴史的仮名遣い**　語の頭以外の「は・ひ・ふ・へ・ほ」→「わ・い・う・え・お」／「ゐ・ゑ・を」→「い・え・お」／「む」→「ん」（言はむ→いわん）／「やう」→「よう」（やうやう→ようよう）。答えは**すべてひらがな**で書く。

三　**古語**　今は使わないことば（**いと**＝とても、**よろづ**＝いろいろ）と、今と意味がちがうことば（**うつくし**＝かわいらしい、**あやし**＝不思議だ）がある。注と前後の文から意味を考える。

四　**主語をおぎなう**　古文では「～が」が省かれることが多い。**登場人物に印をつけ**、だれの動作かを前から追う。

五　**会話をさがす**　「　」のほか、「**言ふやう**」（言うことには）・「**と**」・「**とて**」が会話の目印。

六　**係り結び**　文の中に「**ぞ・なむ・や・か**」があると文末が「～ける」などの形に、「**こそ**」があると「～けれ」の形に変わる。「ぞ・なむ・こそ」は意味を強める。

例題　次の古文（『竹取物語』の一部）を読んで、あとの問いに答えなさい。

かかるほどに、宵うち過ぎて子の時ばかりに、家のあたり昼の明さにも過ぎて光りたり。望月の明さを十合せたるばかりにて、ある人の毛の孔さへ見ゆるほどなり。

（注）子の時＝夜中の十二時ごろ。望月＝満月。合せたる＝合わせた。

（1）「宵」の読みを現代仮名遣いに直し、ひらがなで書きなさい。（2）家のあたりの明るさを、何にたとえているか。本文中から抜き出しなさい。

解き方　（1）語の頭以外の「ひ」は「い」に直す。（2）「～ばかり」は「～くらい」という意味。家のあたりの光を、「満月の明るさを十も合わせたくらい」とたとえている。

答え　（1）よい　（2）望月の明さを十合せたる（「ばかり」までふくめてもよい）

宿題　次の『竹取物語』の一部を読んで、あとの問いに答えなさい。

【ここまでのあらすじ】美しく成長したかぐや姫は、ある年の夏ごろから、月を見ては悲しむようになった。そして、自分は月の都の人で、八月十五日に迎えが来て帰らなければならないと、翁たちに打ち明けた。

この事を御門聞しめして、竹取が家に御使遣はさせ給ふ。御使に竹取出で会ひて、1泣くこと限りなし。この事を歎くに、髪も白く、腰もかがまり、目もただれにけり。翁、今年は五十ばかりなりけれども、物思ひには、片時になむ老になりにけると見ゆ。御使、仰せ言とて翁に言はく、「いと心苦しく物思ふなるは、まことか。」と仰せ給ふ。竹取、泣く泣く申す、「この十五日になむ、月の都よりかぐや姫の迎へにまうで来なる。尊く問はせ給ふ。この十五日には人々賜はりて、月の都の人まうで来ば、2捕へさせむ。」と申す。

（『竹取物語』による）

（注）御門＝帝（天皇）。聞しめして＝お聞きになって。御使＝お使いの者。遣はさせ給ふ＝おつかわしになる。かがまり＝曲がり。ただれにけり＝ただれてしまった。物思ひ＝心配ごと。片時に＝あっという間に。仰せ言＝帝のおことば。心苦しく物思ふなる＝つらく思い悩んでいるというの。まうで来なる＝やって来るそうです。尊く問はせ給ふ＝ありがたくもおたずねくださいました。人々賜はりて＝人々（兵士たち）をいただいて。

問一　2捕へさせむを現代仮名遣いに直し、すべてひらがなで書きなさい。

問二　1泣くこと限りなしとあるが、泣いたのはだれか。最も適切なものを、次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　御門　　イ　御使　　ウ　竹取（翁）　　エ　かぐや姫

問三　翁が、かぐや姫のことを嘆いたために、急に年をとったように見える様子を表した部分を、本文中から二十字で抜き出しなさい。（句読点も一字に数える）

問四　竹取（翁）が帝のお使いに何をお願いしているか、また、それは何のためかを、次のようにまとめた。［　　］に入ることばを、二十字以上、二十五字以内で書きなさい。

竹取は、［　　］と申し上げている。

解答（答えと短い解き方）

歴史的仮名遣い 基礎② 竹取物語の短い一節

宿題

問一 とらえさせん

語の頭以外の「へ」→「え」、「む」→「ん」と直す。

問二 ウ

直前に「御使に竹取出で会ひて」とある。お使いに会った竹取（翁）が泣いたのである。

問三 髪も白く、腰もかがまり、目もただれにけり

「この事を歎くに、髪も白く、腰もかがまり、目もただれにけり」とある。

問四 （例）十五日に人々をいただき、迎えをつかまえさせたい

竹取の会話の最後「この十五日には人々賜はりて、月の都の人まうで来ば、捕へさせむ」から考える。